

幼稚園における音楽リズムの指導は

どのようになつたらよいか

——教育実務指導研究会協議会より——

坂元 「はじめに一通り先生がたからお話をうかがいましょう。」

美田 「今度の研究会に三日間出席いたしました、結論として、私からは何も申し上げることはありません。ただ一つ問題に感じていることは、日本の音楽を日本の教育の中に取り入れることができるかどうかということ。日本の音楽は西洋の音楽とはちがう、日本音楽は異質である、この日本音楽を幼児の指導の中に取り入れるにはどうしたらよいか、という点です。」

松村 「教育における音楽、という点から音楽と子どもとの関係をみると、次のよう

に考えることが出来ましょう。子どもが音楽に働きかけて音楽をとりあげ、そうすることによって結局子どもたちがのびていく。音楽と子どもとのつながりができて、そして子どもの中のものを見て育てるという見方が一つあります。次に音楽が先にある。そして音楽が子どもにも働きかけなければのびていかない。音楽の方から働きかけてはじめてのびていくという見方が一

つあります。この両者を統合して関係させなければうまくいかない、その中に調和のとらえていくという考え方があります。

もう一つは、音楽と子どもが同時にあると考える。音楽すなわち子どもであつて別々には存在しえないとする見方です。

例えば、先生と子どもの関係、と同じです。先生と子どもがあれば、もうそこには

講師

戸倉 ハル

お茶の水女子大学教授

松村 康平

お茶の水女子大学教授

美田 節子

お茶の水女子大学教授

真篠 将

お茶の水女子大学講師

司会

坂元彦太郎

お茶の水女子大学教授

兼付 属 幼稚園長

一つの場・関係がある。そしてその関係・場をお互いのばして行く。聞き手、話し手が同時にあってその場の雰囲気を作り、次第に発展させていく、なども同じ例です。

音楽の場合も、音楽的な関係の変化の全体的な把握が必要である。それは他の教材においておこなわれるものとはちがった関係をもつものである。

また既成の音楽を子どもに与える時、その作品のもつ意図と同時に、与える人の意図を考えることが必要です。子どもの意図とおとなの意図との異なりを両者の関係の中でとらえながら、音楽というものを考えていく。誌の中で動作をつくるようにいろいろの動きの中で役割演技的なものが用意されていくことが必要であります。」

真篠 「低学年の音楽教育について申しますと非常に充実してきたのです。従来は授業時数一週二時間であったものを、今度は最低三時間になっております。

第一学年は幼稚園と最も関係の深い時期

であります。この頃は、第一に感覚的な洗練するのに重要な時期であります。リズム、メロディ、ハーモニー、総ての感覚を養うと同時に、いろいろの楽器に親しむことが大切です。第二に表現技能の基礎を養うこと。感覚的な面とこれとは表裏一体でなければなりません。第三に、幼稚園教育や家庭生活とスムーズな関係になればなりません。

大きく言って以上三つが根拠になり、小学校第一学年の音楽教育が考えられています。

具体的にどうということか申しますと、まず美しい音楽をたくさんきかせることです。全国どここの学校でも共通に聞かせることが望ましいのです。表現の面ですと、歌など、たくさん歌わせることです。音域の問題などもここで出てきます。器楽、従来はリズム楽器だけでしたが、今度の計画では、旋律楽器もとり入れていきます。ハーモニカ、オルガンなどです。何も専門家を作

るための教育ではないのですから、子どもが遊びの中でこれらの楽器に親しめばよいのです。もちろん楽譜など使わず、「さぐりびき」でよいのです。それからだんだん系統的な旋律へ入っていきます。創作、小学一年の年令では無から有を創り出すのではなく、学ぶことはすなわちまねすることであります。五線紙に現れた作曲など要求するのは無理です。初めは、日常会話に抑揚をつけて、これを強調してリズムにする。そのようなことから入っていきます。歌門答などもよいでしょう。そういうことから創作へと導入していきます。

最後に幼稚園と小学校との関係にふれますと、小学校では、幼稚園・家庭・保育園、とそれぞれ別のコースを歩んできた子どもたちを一しよに扱うので、非常にやりにくいのであります。幼稚園が義務制になればこの問題もなくなるでしょうが、今のところは致し方ありません。父兄側にすれば「幼稚園ではよかったのに、小学校をい

やがる、どうしてだろうか」という声も出てきます。これは小学校のカリキュラム自身にも問題がありますが、幼稚園と小学校との話し合いを頻繁にすることによっていくらか解消される問題です。小学校ですることを、幼稚園の先生はよく理解して、どうしたら、幼稚園において、小学校の教育に適合した教育をすることができるか、を知っていただきたい。幼稚園・小学校・両方のカリキュラムについての話し合いをしてなるべく一貫性を持たせることが必要です。両方の先生が話が合つて理解しあうようになつていただきたいです。」

坂元 「幼稚園で歌わせる音楽が小学校の教材と重なっている場合はどうしたらよいでしょうか。」

真篠 「幼稚園の子どもの歌の方が絶対数が少ないので、そういうことにもなると思います。ですから幼稚園の子どもにぴったりの歌をたくさん作つていただきたい。それが第一の道だと思ひます。そしてま

た、幼稚園・小学校の歌が重なつても一向にかまわなれないと思ひます。小学校低学年で扱う「日の丸」など五年生位になつて合唱している。より美しく表現する、子どもの気持をこめて表現させる、より創作的に表現させる、そのような気持さえあれば重なつても一向にかまわなれないと思ひます。ただ、幼稚園で次々と新しいのを教えるのは考えものです。一つの音楽を子どもにきつちりと身につけさせてから次のものに移るのも一つの方法ではないでしょうか。」

美田 「真篠先生のお話に全面的に賛成です。チューリップの歌、夕やけこやけなど幼稚園時代に習つたものを、おとなでも口ずさみます。問題は、より高い程度にもつていく、そのことなのであつて重複はちつとも差しつかえないと思ひます。」

坂元 「旋律楽器についてであります、小学校でハーモニカを吹くからといって、幼稚園でも扱つてよいのでしょうか。」

真篠 「リズム楽器は打てば音が出ますか

ら、非常に簡単なようですけれど、やはりその基礎としてリズム感が絶対必要であります。打つだけですのでリズム楽器は子どもの発達段階からみて適しているのです。が、このリズム楽器も編成ということになりますとそう簡単ではありません。そのよくな時、子どもに無理が生じて、かえつてマイナスになることも起こります。しかし旋律楽器（ハーモニカ・オルガン・木琴・鉄琴など）は子どもに親しませればよいのです。正確なメロディを音楽的に表現させようと思ひるのは無理です。先生のメロディに合わせて子どもはハーモニカをつけて、それをよろこぶようにする、この程度にでしたら幼稚園に旋律楽器をとり入れることも、効果的だと思ひます。しかし、よそでしているからうちの幼稚園でもやろう、なんて考えるのはよくないですね。」

美田 「小学校で旋律楽器を使うのはある程度かまわなれないと思ひます。しかし幼稚園では、子どもたちの全部が全部に適してい

るとはいえないと思います。身体的にも精神的にも子どもたち一人ひとりとはみんなちがったリズムを持っています。三歳位だとだいたい子どもの脈はくと一致しています。何気なく歩いている時に分ります。子ども達は同一に動かない。よくみてみるとその子どものリズムによって動いている。

耳の発達の程度によってもちがいますね。」

坂元 「では次の問題にうつって、子どもに自由に創作表現をさせるにはどうしたらよいか、という点について真篠先生。」

真篠 「子どもに歌を創作させるさせ方ですが、何か一つのまとまったものを作らせようと思ったら大間違いです。子どもの内からにじみ出てくるものがあれば一鼻うたでもよい一それを発展させるようにすることです。動物の啼き声(鳴き声)、犬・猫・ライオン・スズメ・ウグイスなど子どもの喜ぶものがたくさんあります。呼び声、(おかーさん、はーな子さん)もおもしろい。問答形式にもって行くのも自然でよい

でしょう。例えば「うーさん」は「い」何して遊びましょ。「こうして遊びましょ」節をつけて言う」というように。

先生はそれを五線の楽譜に書きとって教材に使うようにすればよいのです。最初はテープなどに吹き込んでよいでしょう。

要するに幼稚園における創作は、何拍子でなくてはならない、何小節なくてはならない、などと考えなくてもよいのです。子どもたちのものを気をつけてみていますと物売りのまねをしたりして日本音階になりがちです。それはそれでよいでしょう。とにかく子どもができるだけ思った通りに表現できるように環境をととのえてあげることです。」

戸倉 「今言ったことでもう十分だと思えます。子どものうたはとてもやさしいと思います。私は動物園すぎで、先日も上野の動物園へ行きました。そこで一番人気のあるのはお猿さんでした。「おさる、おさる、おさる……おさるのブランコ」と子ども

が言ってますので、私が一、二、三、をつけましたら、子どもは帰りの電車の中でも

おさるのブランコ イチ、ニイ、サン

おさるのブランコ イチ ニイ サン

と言っていました、こんなふうでいいでしょうね。」

美田 「おる、おさる……のトクラ式でも、問答のマシノ式でも、実際、相手が子どもですとほんとうにできてきます。(次は節をつけて)

『あんたのおなまえなんですかー』

『ぼーくのおなまえじゅんちゃんですー』

というふうに答えてくれます。」

松村 「おさるのブランコイチニサンはやっぱり戸倉先生ですね。しかしそこにも関係が用意されていた。子どもがあつてブランコがあつてそして、イチ、ニ、サン、が出てきたのです。一つの関係を用意すれば次の関係が作られていきます。次々と関係が動いていくのがおもしろいと思います。」

坂元 「幼稚園あたりで音感訓練を盛んに

やっていますがあれはどうなのでしょう、和音・階名誦、そういう問題についても何か。」

真篠 「音感は生後の教育により身につく

ものです。そして幼稚園・小学校の時期が一番のびる時期であり、その時期に音感訓練をうけないともう身につかないのです。今

の子どもたちは、テレビその他のマスコミの影響で割合によい音感を身につけています。彼らは三つ以上の音の調和の美しさを知っています。絶対音感を身につければ理想的であります。全部の子どもにそれを望むのはちょっとむりでしょう。しかし音感

は幼稚園や小学校低学年の時期に身につけるのが重要でありますから、そういう意味からも幼稚園において、ハーモニィに重きをおいてもらいたいと思います。方法は、遊びや身体的動作の中でとりあげるように心がけるのがよいでしょう。例えばこんな音が聞こえたらこのように動作をする、ちがった音がしたら今度は歩く、というよう

に導いていきます。

階名誦、これはドレミで歌うことですが、読譜、記譜の基礎として、絶対に必要です。シロジニアカク、ドドレレミミレ、

というようにすぐあとから階名誦させます。これは全曲にわたらなくとも、部分的に、よいのです。五線の楽譜のどこが

「ド」で、どこが「レ」ということはわからなくてよいのです。これは小学校の三年生位

になって習うことです。子どもは、初め階名模誦をします。そして自然に階名暗誦をします。そうなったらもう小学校へ入って

から非常に早くです。」

美田 「私は子ども音感教育に興味を持

っているのです。日本の音楽はメロディー感是非常に鋭いのですが、和音感が実にとぼしい。それでなるべく和音の美しい音楽を歌わせるようにしています。階名誦法で

いくと、私の経験では和音感がつかなくなりません。真篠先生のお叱りを受けるかもしれませんが、耳を聞くという意味で和音感

を身につける方に賛成します。」

戸倉 「和音で動作することは、とても良いと思って今考えています。兎がピョンピョンと山を下りるなど和音で動作するということがいいですね。夏の講習会に発表しましょう。」

坂元 「リズムと遊びとどちらが基礎的なものでしょうか。」

戸倉 「それは、どちらが先とは言えないでしょう。二つが一しょになっている形を

指導するようにしています。」

坂元 「歌のついている曲と、歌のない曲とはリズム指導にどちらがよいでしょう。」

戸倉 「歌を伴ったものは唱歌ゆうぎですね。歌を伴わないものは、行進ゆうぎといえますか。歌を主題にするのもよい、曲だけするのもよい、いずれもよいですね。両者併用するのがよいと思います。」

坂元 「それでは、時間ですから、この辺で協議会を打ち切ります。」